

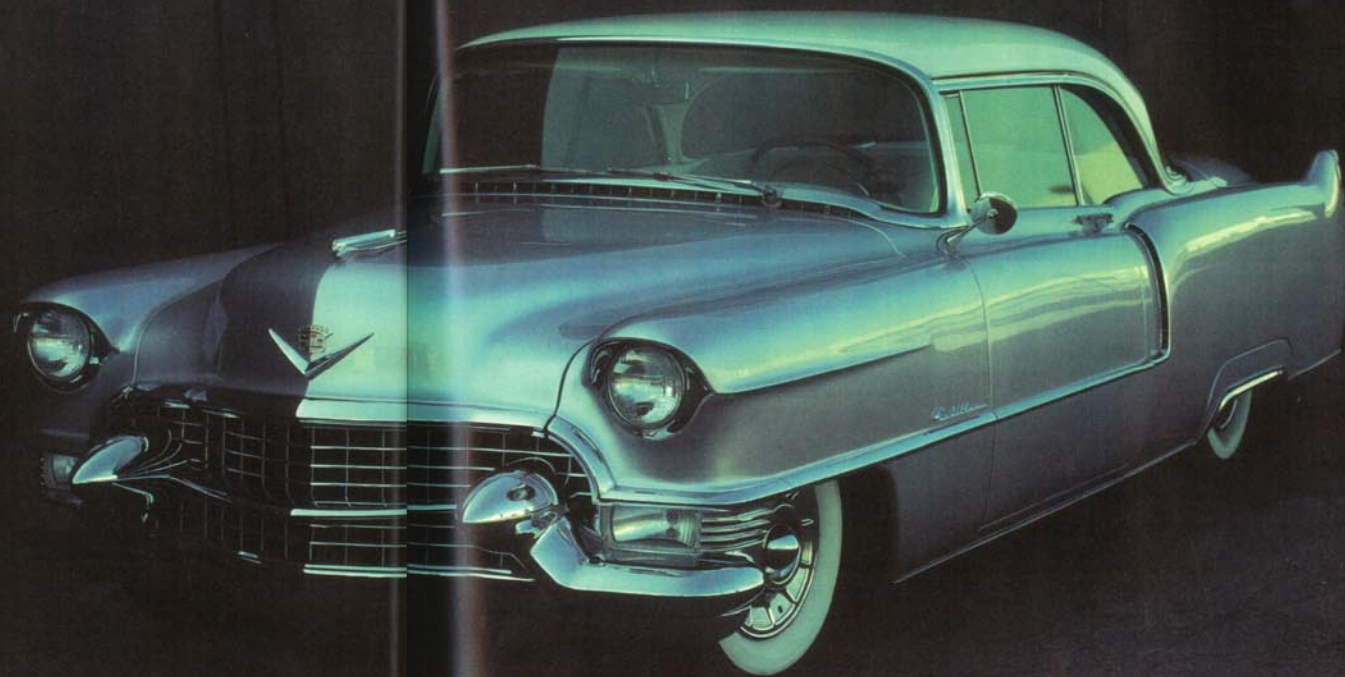
Speed Klan Volume_13

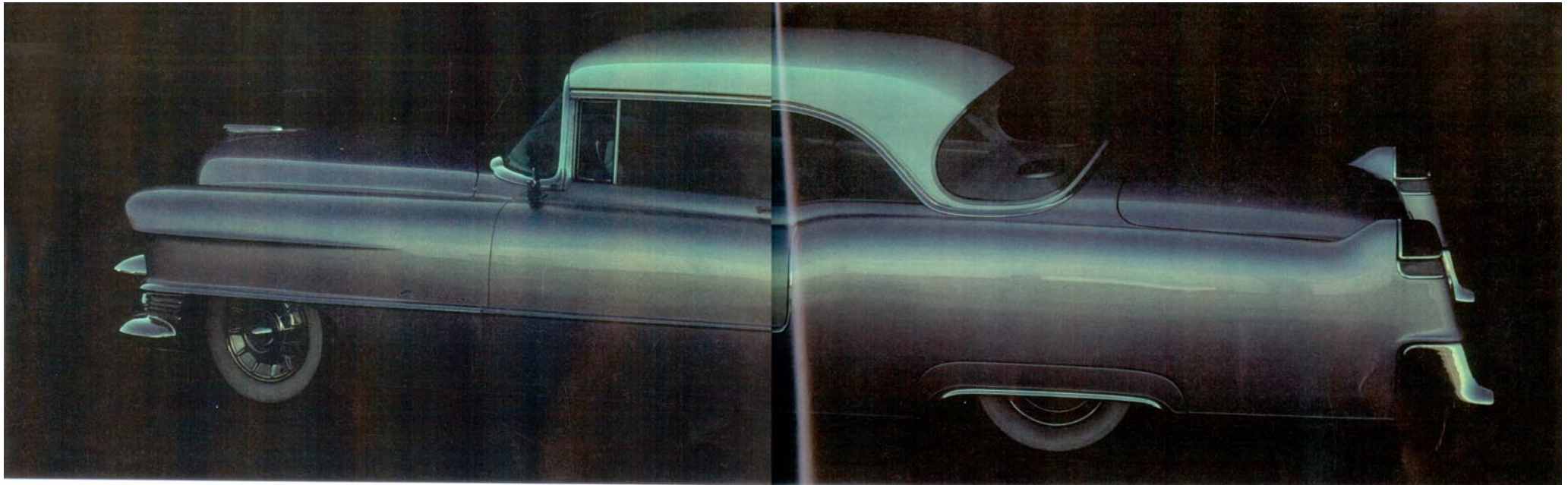
Photographs by SHU TOKONAMI
Text by TAKEMARU ENDO

JIMMY "The RIGID"

こだわりの仕事を続ける、小さなショップオーナー

その結果はともかく、自分の向かう方向に対して着実に、
そして堅牢な道を切り開きながら進む男がいる。
仮にその先に待ち受けるものが輝ける栄光ではないとしても、
その軌跡自体が男の創造物となるのだ。





CIRCLE CITY HOT RODSはアンティークの街、CITY OF ORANGEの東にある。

デスクひとつのオフィススペース（実際のところはパーツ置き場と化しているが）とクルマ3台が横に並べられる工房を持つ、極めてコンパクトなショップだ。

しかし、このショップから生み出されるHOT RODが非常に高度なクオリティを備えているという評価は、静かに、そして確実に広がっている。

「ショップのポリシーかい？ そんなのはあまり考えたことがないけれど、自分の好みでいえばHIGH QUALITYとDETAILINGにこだわっているよね。具体的には各部の強度や補強位置の確実さとか、ブラケット類の美しさなんかだね。もちろん溶接の確かさやビードの仕上がりに関するのは基本中の基本だけど、どの部分に角パイプを

使ってどこに丸パイプを使うかとか、どんな角度でバンドさせるかなんてことには気を遣うし、こだわりの作業だね。結局それがクルマの出来を左右するからね」

ジミー・ホワイト（JIMMY WHITE/33歳）は少しはにかみながら少しずつ話し始めた。

彼のショップで働いているのは通常、彼ひとりである。

「基本的にはオレひとりですべて仕上げるシステムなんだけど、必要に応じて手伝ってくれる仲間はいらんだ。まあ、オレのやり方を理解してくれるひとりか

ふたりさ。そんなときに頼む作業も、その部分に関してはすべてをいつにやらしてもらうんだ。例えばブレーキラインの組み付けとかワイヤリングとかね。ひとつの作業項目を何人かで手がけると仕上がりの統一性に違いが出るかもしれないし、責任がだれにあるかも不明確になる。本当はオレひとりですらなければならぬ仕事なんだしね」

彼が「自動車職人」のスタートを切ったのは、16歳のときに手に入れた最初のクルマ、'65年FORD MUSTANGファストバックの289モーターをオーバーホールしたときである。

「オレの兄貴やその仲間たちがCAMAROやBARRACUDAなんかを乗り回しててさ、その連中がいろいろ教えてくれたんだ。そのモーターはうまく組み上がったし、そのほかのこともみんな自分でやっていたから自然と何でも自分でやるようになったんだね」

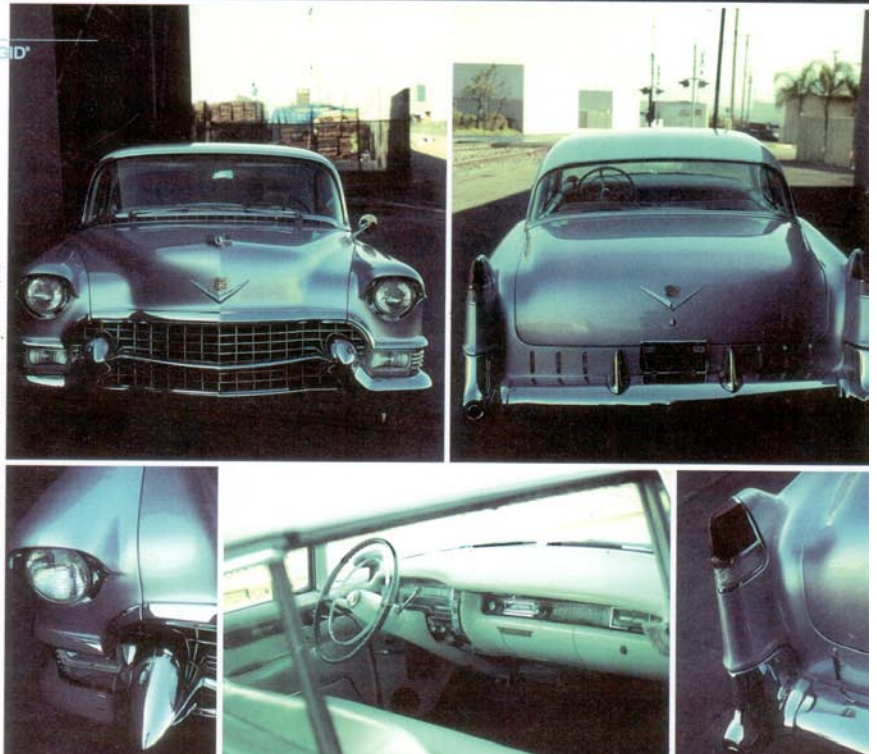
彼がこのショップをオープンしたのは今から約2年前である。それまでのかなり長い「修業期間」が彼の技術と知識を磨き上げた。「ひと通り何でも自分流にこなせるようになった頃、ロッド・ミレン（RODとSTEVEのMILLEN兄弟はレーシングドライバーとしても、STILLENの経営者としても高名である）のショップに就職したんだ。そこで作っていたのは主にオフロードレーサーだったんだけど、溶接のテクニックやいろいろな工作機械の扱い方と作業のコツなんかを身につけるいいチャンスだったよ。あんな工作機械なんてとて自分で持つのは無理だからね」

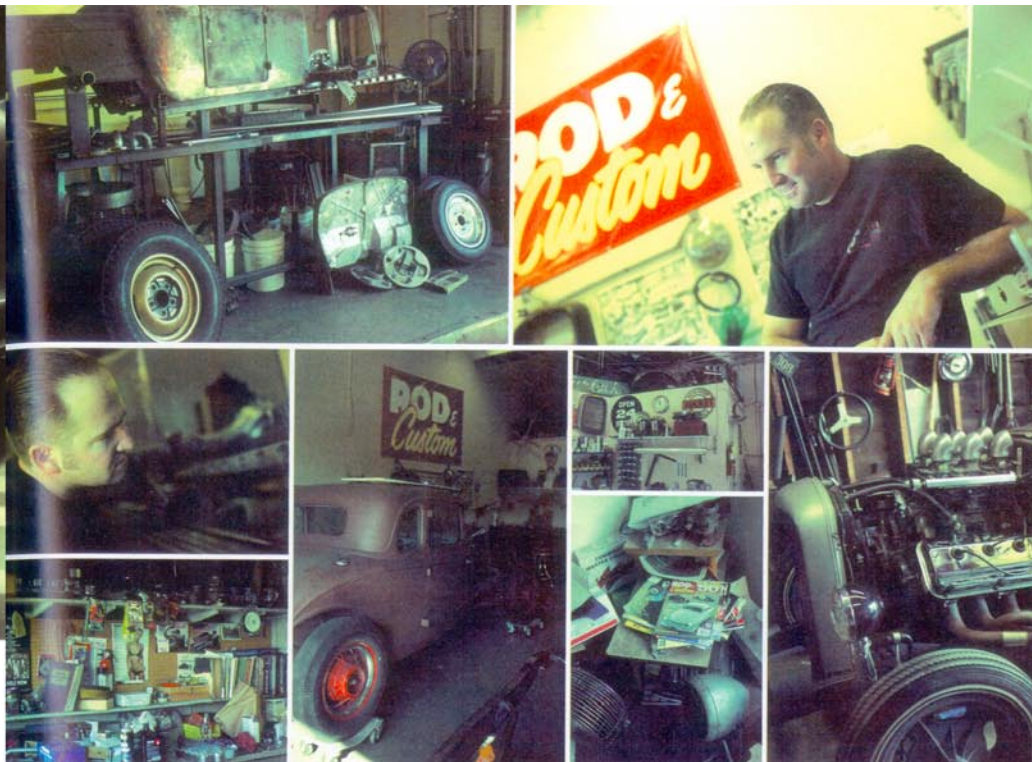
その当時、同じ地域で生まれ育った連中がなんとなく集まって結成したカークラブが「SHIFTERS」である。彼もそのオリジナルメンバーのひとりであった。

「今でもアンソニーやケビンとは時々会っているよ。みんないやツラだけどオレはいろいろと忙しすぎてクラブの集まりなんかにもなかなか参加できないから、なんとなくメンバーから抜けたって感

JIMMY 'The RIGID'

JIMMYとMICHELLEの「よそ行き」用として仕上げられた'55年クーペ・デビル。完璧なボディをまとったそのボディは、フルオリジナルのままであるが、圧倒的な存在感と妖艶な官能美を湛わせている。もちろん335V8をはじめそのボディの下に隠されたドリフトレーンにはJIMMYの手により徹底的にリビルトされており、今からでも大活躍中に出発できるコンディションだ。





じかな。オレってどっかっていうとひとりである方が気が楽なんだね]

SHIFTERSのメンバーとして街を走り回った彼のHOT ROD、354HEMIを積んだ'30年モデルAクーペは、今でも自宅ガレージに当時の姿のまま保管されている。青春の象徴のように。

「RODのショップの次にBOYDのショップへ移ったんだ。やっぱりオフロードレーサーよりHOT RODの方に魅力を感じたからね。あそこでは主にシャシーの製作とボディパネルのメタルファブリケーション（板金技術）をやらせてもらった。とにかくハイダラーなオーダーばかりだから、どんな作業にもハイクオリティーが要求されるのだ。こんなことまでやるのかよ！ って内容の連続だったけどオレにとっては楽しかったし勉強になったな。RODのショップでテクニクは身につけていたから作業にとまどうことはなかったけれど、HOT RODビルダーとしての流れや心構えみたいなものを具体的に理解できたからね」

そんな彼のショップへオーダーに来るクライアントのほとんどは、予算的に余裕のある年配者が多い。

「オレのやり方でHOT RODを作っていくと、どうしても時間がかかるんだ。大がかりなプレス加工の必要なパーツや精密な削り出しが必要なパーツ以外はなるべく自作するようにしているし、取り付け位置や形状も一台一台異なるからね。まあクロ

スメンバーやブラケットなんかも市販品を使えば早いし簡単なんだけど、それじゃあ、ただの組立工になっちゃうのだ。クライアントの中にはそれが生まれて初めてのHOT RODだなんていうひともあるけれども、作業内容や作業工程を細かく説明すると時間的なことも予算的なことも良く理解してくれるし、また、そういうやり取りを楽しんでもくれるからね。

オレとしてはこのやり方をずっと続けて行くしかないんだけどさ、ビルダーとしては自信があるけれどショップの経営者としてはどうだろうね。まあなんとかこのショップを続けていければいいなるところかな。今はね」

現在作業中の'32年5ウインドークーペは、彼のワンオフ・シャシーにオールスチールボディを架装し、そのモーターは完全にリビルトされたオールズモビル324ROCKETとT5マニュアルトランスミッションという内容である。取材打ち合わせに立ち寄ったときに偶然そのプロジェクトのクライアントにも会ったのだが、JIMMYの説明する作業工程を案に楽しそうに聞き入っていたのが印象的だ。

ショップの評価を決めるのは決してその規模ではない。いかにクルマを愛し、誠実に取り組んでくれるか、そしてその男のセンス。自分の向かう方向に誠実に進む姿が、彼のビジネスを世間に評価させているのだ。

「JIMMYはとてもやさしいし、まじめでハズバンドとしては申し分がないけれど、少し忙し過ぎるかな。いつもクルマ、クルマ、クルマなんだから…」

彼のワイフMICHELLEの感想は良質なビルダーのワイフに共通している言葉でもあり、それはビルダーとしての勲章でもあるのかもしれない。



JIMMY "The RID"

写真左上に見えるプロジェクトは'26年ピックアップをテーマに、JIMMY自身のために進められている。2x4のチューブを基本に理想的な構成で組み上げられたフレームや美しくドリルドされたフロントエンド、また、アフターマーケット製と見まごうばかりに板金されたオリジナルボディ等、彼の技術のシールドとも書ける存在である。彼のクライアントたちはこのプロジェクトを見て、彼へのオーダーを決心するのだ。

